

【論文】

小学校英語教育における質の高い教員免許状更新講習の開発 Development of Contents in the Teaching Certificate Renewal Program for English Language Education at Elementary Schools

辻 伸幸

小学校英語教育に関連する新学習指導要領の目標に子どもたちが迫っていくためには、教員研修が必要不可欠である。小学校英語教育に特化して全教員に教員研修を強化していくことは困難な現状で、教員の意志で選択することのできる教員免許状更新講習は、毎年、実施することが可能であり、有効な方策の一つになり得る。本研究は、小学校英語教育における質の高い教員免許状更新講習を開発することが目的である。そのために受講者のニーズや英語コアカリキュラムを考慮し、実務家教員として小学校教員の視点を大切にした。「小学校英語教育の方向性」「基礎的英語力のプラスアップ」「小学校英語教育を支える背景知識」「小学校英語教育に必要な教育技術」の4本柱で開発した。

キーワード: 小学校英語教育、教員免許状更新講習、実務家教員、質の高い講習内容

1 はじめに

いよいよ来年度(2020年度)から新しい小学校英語教育の本格的な実施が始まろうとしている。2017年3月に小学校学習指導要領が告示され、中学年では、年間35単位時間の「外国語活動」が必修領域として、また高学年では、年間70単位時間が教科「外国語」として学ばれる。2018年度から2019年度の2年間の移行措置を経て、2020年度から完全実施の運びとなる。

時代の急激な変化に適切に対応するため、学習指導要領も改善を重ねてきた。大きな改善点の一つとして、すべての教科・領域において育てるべき3つの資質・能力を据え、小学校から高等学校まで連続した学びを整理したことが挙げられる。具体的には生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の3つである。

外国語科の「知識・技能」では、「聞くこと」「話すこと」について音声や表現に気付き、慣れ親しんで知識として理解し、技能として使えることが目標である。また、それらの十分に慣れ親しんだ語彙や表現を「書くこと」「読むこと」で慣れ親しむこと

も加わっている。

「思考力・判断力・表現力等」では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、「聞くこと」「話すこと」を試みたり、十分に慣れ親しんだ語彙や表現から類推して「読むこと」や語順を意識して「書くこと」に繋いだりする。

「学びに向かう力・人間性等」では、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指している。

このように上位目標の枠組みを保ちながら各教科等の下位目標を設定していくことは、子どもたちの学びの過程を連続して把握することができ、一貫性をもつことができると推論できる。

全教科等において、教員は指導の内容や方法を新学習指導要領に合致するように再構築する必要がある。ましてや、今まで存在しなかった教科としての外国語は他教科等に比べて障壁が大きくなることは明白である。しかしながら地道に着実に行わなければならぬことも事実である。解決法は教員研修と教員養成でしかないのである。

本研究では、受講対象の教員は決まっているが、毎年、集中的に研修時間が確保され、教員自身の自らの希望で受

講することができる教員免許状更新講習に焦点を当てる。本研究は、筆者が講師として実施した和歌山大学教員免許状更新講習「小学校英語教育の基礎基本はこれで大丈夫」の内容を検証し、次年度に向けたより質の高い教員免許状更新講習の内容を開発することである。検証は、受講者に対して実施した質問紙調査結果の考察を含めて行う。

2 小学校英語教育の変遷

公立小学校における英語教育の始まりは、明治時代の先駆的な実践を除くと、1992年に大阪市立真田山小学校と味原小学校が文部省（現文部科学省）の研究開発学校として指定され教育実践と研究に取り組まれた時からを挙げることが多い（アレン玉井 2010、卯城 2015、岡・金森 2007、松川 2004、樋口 2010）。2020年から学習開始時期の早期化及び教科としての導入という新ステージに入るまでの28年間、その時々の状況に合わせて教員研修が行われてきたのである。2020年度からの新ステージは、全く新しい別の教育が実践されるのではなく、今までの蓄積の上に進められていく。教員研修という範疇においてもこの考え方は重要であり、その意味からも1992年から2019年までの日本の小学校英語教育の変遷をここで振り返ることにする。

1992年から現在まで文部科学省の会議等で小学校英語教育に中心的に関わってきた現岐阜女子大学長の松川禮子氏が、その歴史的な変遷を4つのステージに分類して簡潔にまとめている（松川 2019）。

第1ステージ

1992年から2001年までの文部省の研究開発学校として国際理解教育の一環としての英語教育を実験的に導入していく段階。形態としては、「教科活動として取り組む研究」「クラブ活動として取り組む研究」「教科と特別活動を組み合わせて取り組む研究」の3種類があった。

このステージで課題となったのが「小学校教育全体のカリキュラムとの関係」「研究開発学校実践の一般化」「教科としての系統性」「中高英語教育との連携」であった。

第2ステージ

2002年から2010年までの「総合的な学習の時間」に「国際理解教育」の一環として英会話などを実施できるように

なった段階。ここでは、学校の実態に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習を行うことが重要とされた。その意味からもこの時期の英語教育は英語活動と呼ばれていた。

このステージでは、学校間のばらつきが大きいという課題や総合的な学習との関連性から教育課程上の位置づけの困難さなどの課題が出された。

第3ステージ

2011年から2019年までの「外国語活動」必修化の段階。学習指導要領では、「外国語活動」を必修領域とし「総合的な学習の時間」から切り離した。また、目標として、「言語や文化についての体験的な理解」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」の3本柱が設定された。

「外国語活動」が導入され、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められたが、一方で次の課題が指摘された。

- ・音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。
- ・日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。
- ・高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる。

第4ステージ

2020年から新学習指導要領が完全実施され中学年で必修領域として「外国語活動」が、高学年で教科として「外国語科」が開始される。

松川（2019）は、外国語活動から「外国語科」になつても、小学校での英語学習の本質は変わらず、伝え合う内容がコミュニケーションでは最も大切であると述べている。筆者も同感であり、これまで大切にしてきた児童が伝えたい、尋ねたいと考える内容を言語活動として組み入れていくことが肝要である。

3 教員免許状更新講習

3.1 教員免許状更新講習の概要

2007 年に成立した「教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部を改正する法律」に基づき 2009 年から始まった教員免許更新制によって受講が義務付けられた講習のことを指す。

文部科学省は、教員免許更新制の目的を「その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すもの。」と明言している。また、不適格教員の排除を目的としたものではないと付け加えている。

すべての教員免許状には 10 年間の有効期限が設定されている。有効期間を更新して免許状の有効性を維持するため、受講対象に該当する者は、2 年間で 30 時間以上の教員免許状更新講習の受講・修了が必要となる。教員免許状更新に必要とされる講習は「必修講習」「選択必修講習」「選択講習」の 3 種類がある。

「必修講習」は、すべての受講者が受講しなければならない領域であり、「選択必修講習」は、所有する免許状の種類、勤務する学校の種類又は教育職員としての経験に応じ、すべての受講者が選択して受講する領域である。「選択講習」は、受講者が任意に選択して受講する領域である。

「必修講習」と「選択必修講習」は、6 時間以上、「選択講習」は 18 時間以上受講しなければならない。通常、1 日 6 時間で一つの講習が開催されるので、「必修講習」が 1 講習で 1 日、「選択必修講習」が 1 講習で 1 日、「選択講習」が 3 講習で 3 日の計 5 日間の講習が必要となる。

小学校英語教育に関する教員免許状更新講習は、「選択講習」として多様な教科等に関する講習の中から、受講者が任意で選んで受講することになる。

3.2 和歌山県内における教員免許状更新講習

和歌山県内における教員免許更新講習は、制度が始まった 2009 年から全国的に見ても先進的な取り組みがなされてきた。和歌山大学が主催し、県下 5 つの私立・県立大学が連携して実施している。これらの大学が免許管理者である和歌山県教育委員会と共に連絡協議会を設置して、県の地理的特

色や県内に勤務する教員が保持する教員免許状に応じた講習を実施している。また、教員免許状更新講習に係る事務手続きは、すべて和歌山大学が担当している。

このシステムは、受講する教員の立場から考えると、利便性が格段に良くなる。教員免許状更新講習に関する情報が募集要項を見ればすべてを把握することができるからである。申し込みは、和歌山大学の教員免許状更新講習システムのホームページから ID を取得して、講習を web 予約したのち申込書類を送るだけである。これが、個々の大学で別々に実施されると、受講する側は、情報を得るだけでも時間がかかり煩雑さが増大してしまう。

和歌山大学は、教員免許状更新講習を開始する以前から県教育委員会と共同参画事業「ジョイント・カレッジ」を精力的に続けていた環境もあり、その中の一部門である「教員養成・教員資質向上推進部会」で教員免許更新制を検討課題として取り上げ協議をしてきた。その中で、受講対象者、県教育委員会との具体的な協力態勢、開設時期や場所、趣旨とニーズを踏まえた講習内容、教員アンケート、免許更新講習協議会設立などの検討を加える共に試行講習を実施して 2009 年からの本格的実施に漕ぎ着けたのである(岸田 2008)。

筆者が在籍する和歌山信愛大学の系列大学である和歌山信愛女子短期大学は、早くから教員免許状更新講習の開講計画をもっており、初回から協議会に参加している。後に、近畿大学生物理工学部や私立の小・中・高等学校教員を管轄する県総務学事課も加えた 5 者による協議会へと拡充され、現在では、和歌山信愛大学、和歌山県立医科大学、高野山大学、東京医療保健大学和歌山看護学部も加入し発展を遂げてきた。

2019 年度に和歌山県内で計画された教員免許状更新講習は、「必修講習」が 12 講習、「選択必修講習」が 24 講習、「選択講習」121 講習にも及ぶ充実ぶりである(和歌山大学 2019)。

教員免許状更新講習の主体は大学でも教育委員会でも可能ではある。しかし、教育委員会が実施する教員 10 年目の経験者研修などとの区別を明確にし、教員の強制的に受講せられているという学びへの抵抗感を払拭するために、大学が責任をもって教員免許状更新講習を主催しなければならないという考え方(岸田 2008)は重要である。多くの教員が、自身の教育力を上げようと考える時、やらされた感の研修ではなく、何が足りないのか、何を学びたいのかを勘案し教員免許状更新講習を受講できるように環境を整えるのは大学が適任であ

る。

特に、「選択講習」は、教員の選択意志が尊重される度合いが高い。教員免許の種類、担当している教科や学年、興味や関心に応じることのできる人的資源が大学にはある。岸田(2009)は、受講者の「選択講習」の学習ニーズとして次の3点を示している。

- ・職能成長の基礎的資質としての学問へのアカデミックな要求
- ・実践的な職能成長への要求
- ・幅広い教養への要求

これらの中でも、「実践的な職能成長への要求」は、最もニーズが高く、教員に求められる資質能力の向上や校種や教科の専門性という観点からも充実させることが望まれるが、現実的には困難である。その解決策として、研究施設、弁護士等の専門家、附属学校などの外部教育資源の活用の提言がある(岸田 2009)。

筆者は、これに加えて大学の実務家教員の積極的な教員免許状更新講習の実施を提案する。筆者が勤務する和歌山信愛大学は、幼稚園や小学校現場を経験する実務家教員があり、それぞれの分野で現職教員の実践的な職能成長に結びつけることができる力を有している。筆者は、長年、小学校教員として勤め、小学校英語教育についての教育実践と研究を続けてきた実務家教員である。小学校英語教育の歴史が変わろうとする中で、小学校英語教育をテーマにした教員免許状更新講習を担当できる意義は大きいと考えている。

3.3 小学校英語教育における教員研修

3.3.1 小学校英語教育における教員研修の課題

本研究では、小学校英語教育に関連する教員免許状更新講習の開発を目的としているが、大きな範疇としての小学校英語教育における教員研修の課題について先に述べておく。

小学校に英語教育が導入されてから現在まで続いている大きな課題として教員研修がある。大学で小学校英語教育についての専門的事項や教育方法を学んできていない教員が大多数を占める中で、教員研修の重要性(アレン玉井 2010、大城 2005、加賀田 2013、田辺 2017、廣江・畠田・松元

2015)が呼ばれるのは、当然である。重要な課題であるとされながらも、根本的に解消できるだけの施策が実施されてこなかったことも事実である。

江利川(2015)は、一貫して明治期の小学校英語教育が頓挫した大きな要因は、教員の資質不足にあったことから我々は学ぶべきであると指摘している。現在も教員研修の不十分さが突出している。文科省の施策では、各小学校1人の中核教員が3日間の中央研修を行い、その後、伝達講習や校内研修を勤務校で実施し小学校英語教育の充実を図る手法である。筆者は小学校現場に17年以上在籍し、小学校英語教育に関する教員研修を見てきたが、中核教員から学校全教員にスムーズに伝達できているとは言い難いと考えている。

国の政治体制や文化の違いから一概に比較することはできないが、1997年から教科として小学校英語教育を実施している韓国では、担当教員に120時間の研修を課している。筆者は、韓国の小学校英語教育事情を調査する目的で、2019年10月に大邱教育大学、金海市の小学校を訪問した。その中で、小学校では英語教育の専科教員が多く存在していることが明らかになった。また、実際の授業も参観することができ、教師の英語の授業力や英語運用力は高いことが認識できた。校長先生の面談の中で、今でも120時間の英語の研修は続いていることが判明した。このような韓国の状況を見る限り、日本の小学校英語教育に係る教員研修は貧弱であることは否めない。

国や都道府県による潤沢な予算措置が見込めない中、教員研修は引き続き質の向上に努め、効率的に実施することが必要である。しかも、教員のやらされ感を軽減した方法を考えいかなければならないであろう。

3.3.2 小学校英語教育における教員研修の種類

小学校英語教育に関連する研修は、様々なものが全国各地で実施されている。まとめたものが以下である。

- ① 国が管轄する研修
 - ・「小学校における外国語教育指導者養成研修」
毎年、実施されており2019年度は、担当する120名の教諭及び指導主事等対象に実施されている中央研修。
 - ・「生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業」として英語教育改善プラン推進事業」

各都道府県等における英語教育推進リーダーによる研修であるが事業を公募して実施している。

② 都道府県や市町村が管轄する研修

教育委員会や教員研修センター等による研修

③ 大学が管轄する研修

教員免許状更新講習と公開講座等の講習がある。なお、教員免許状更新講習は、都道府県教育委員会等も開設することができるが、実施している団体は少ない。公立学校教員を対象に実施している岩手県教育委員会や栄養教諭を対象にしている山梨県教育委員会などの例がある。

④ 学会や研究会が行う研修

小学校英語教育学会や日本児童英語教育学会などの英語教育に関連する学会や研究会などが実施している。

⑤ 民間団体や企業が行う研修

児童英語教育で教材等を出版している企業や教科書を販売している企業などが主催する研修がある。

⑥ 学校が行う研修

現職教員研修の一環として、校内研究授業とその協議、英語教育推進リーダーによる伝達講習、外部講師を招聘しての研修などがある。

⑦ 自己研修

自己研修では、書籍を購入して研修を行うものから、自身の英語運用力を高めるための英会話教室や海外研修に参加するなどがある。

研修で問われる量と質である。韓国のように 120 時間の大量の研修を強制的に取らせるのは現実的ではない。働き方改革が進む中、英語教育ばかりに研修時間を割くことはできない。そうだとすれば、質が大切になってくる。様々な組織が実施している研修内容の質の向上はこれからも図っていかなければならない。それと共に重要になってくるのが研修を受ける側である。教員が研修をやらされていると感じていれば、いくら内容が良くても資質能力の向上に結び付かなくなる。

小学校英語教育に関して問題意識が高い教員は、自分の意志で研修を取捨選択して、自分が必要としている資質能力を獲得していくであろう。小学校英語教育に関する教員免許状更新講習は「選択講習」として開講され、受講をしたいという教員の存在がある。関心も少ないので強制的に受けさせられる研修ではない。この点からも教員免許状更新講習の質的向上の必要性がある。

3.3.3 小学校英語教育に関する教員免許状更新講習

の先行研究からの知見

大学が教員免許状更新講習を開講するにあたって留意しなければならないことは、第一に受講する教員のニーズを的確に把握することである。ニーズを把握するためには、アンケート調査の実施が必要不可欠である。碓井ら(2009)が 2008 年に大阪南部の小学校教諭(135 名)と幼稚園教諭(60 名)を対象とした調査で、小学校教員の「選択講習」の希望した内容 18 のうち 3 項目が小学校英語教育に関するものであった。具体的には、「小学校英語指導のための教材研究(60.7%)」「小学校英語指導のための教育論と実践能力の向上(26.7%)」「各国の初等英語教育の現状(16.3%)」であった。

次に教員ニーズとは異なる教員の意識について教員免許状更新講習を行う側がしっかりと認識することも大切である。特に、小学校英語教育について、大学で専門的に学んだことがなく、教育実践の経験が乏しい小学校教員が多い現状を知る必要がある。小学校英語教育が中学年から必修化し高学年から教科化されれば、半数以上の教員が関わる必要があるため、指導への大きな不安を教員が抱くことは自然である。この教員の不安感は、今まで指摘してきたことでもある。諸井(2009)は、小学校英語教育に関する小学校教員の意識調査を実施し、半数以上の小学校教員がその教育を負担と感じ、「自分の英語力」「年間指導計画・授業指導案作成」「実際の授業の進め方」「教材の開発・準備」の 4 項目が不安要素になっていることを指摘した。これらの不安を改善していくための大きな手立てが教員研修であろう。2020 年度からは、教科書が採択され、指導書や各種教材の充実が進むため「年間指導計画・授業指導案作成」や「教材の開発・準備」の面では、不安感が和らぐ可能性もあるが、他の項目については教員免許状更新講習を含め他の教員研修でも扱うことが肝要である。

別的小学校英語教育に関する教員免許状更新講習開講の留意点として、研修を担当する側の考えを組み入れることがある。猪井(2009)は、受講者が最も希望する明日からの授業で活用することのできる実践的な内容を扱うことも大事であるが、その実践を支えている理論についても扱うべきであると述べている。このことは、小学校教員養成で小学校英語教育の必修としてコアカリキュラムが 2019 年度から始まっており、理論と実践に対応することと合致している。また、長濱(2016)は、

受講ニーズだけではなく国が進める教育改革の中で求められている新しい内容として「小学校での早期英語学習の導入」の必要性を訴えている。したがって教員に対するニーズを把握すると同時に、教育改革など、その時々の大観的な視点も重要であることが理解できる。

4. 小学校英語教育に関する教員免許状更新講

習事例

4.1 担当者、講座名、目標

平成 31 年度和歌山大学教員免許状更新講習の選択講習の一つである「小学校英語教育の基礎基本はこれで大丈夫」は、筆者が担当を 1 人で務めた。筆者は、和歌山信愛大学で英語教育を専門として教育と研究を続けている。大学教員になるまで小学校で英語教育の実践・研究を 22 年間行つてきた実務家教員である。実際に子どもたちに指導してきた教師の視点をもって講座を担当するように心掛けた。特に、子どもがどのような考え方や思いをもって授業に参加しているのか教師が意識できる視点を大切にした。

講座名は、「小学校英語教育の基礎基本はこれで大丈夫」とした。小学校英語教育に関する指導内容、方法、理論等について学んだ経験が少ない教員にとって指導することへの不安を軽減することに繋がればという願いからこの講座名にした。

本講座の目標は、以下の 4 つを設定した。

- ・小学校英語教育の方向性を把握する。
- ・小学校英語教育に必要な基礎英語力をブラッシュアップする。
- ・小学校英語教育を支える背景知識(理論)とクラスルームイングリッシュを習得する
- ・小学校英語教育に必要な教育技術を習得する。

4.2 講座日程、受講者

2019 年 6 月 15 日(土曜日)に開講し日程は表 1 の通りである。

日程は、和歌山大学教員免許状更新講習の選択講習とし

て決まっており、それに従った。

小学校教諭、中学校英語科教諭を主な受講対象者として募集を行った。実際の参加者は、小学校教諭が 17 名、中学校教諭が 8 名、高等学校教諭が 3 名の計 28 名であった。講座内容が小学校英語教育に限定している中で、中学校教諭が約 3 割も占めていることが特徴的である。小中連携の重要性が指摘されており、中学校教諭の意識の高さが推察できる。

表 1 教員免許状更新講習日程

9:00 – 10:20	80 分	1 コマ目
10:30 – 11:50	80 分	2 コマ目
12:40 – 14:00	80 分	3 コマ目
14:10 – 15:30	80 分	4 コマ目
15:40 – 16:20	40 分	修了認定試験

4.3 講習内容

講習は 80 分が 4 コマあったので、本講習の 4 つの目標にそれぞれ対応させて内容を熟考した。1 コマ目から順を追つて実施内容を以下で述べる。

4.3.1 1 コマ目 小学校英語教育の方向性

受講者は、3~4 名のグループになって受講するスタイルを採用した。少人数での協働的学習を受講者に体験してほしいという担当者の思いがあった。最初は、アイスブレーキングとしてスマートトークを実施した。小学校の英語教育では、今まで学んできた語彙や表現を使ってみる機会をスマートトークとして授業に組み入れるように文部科学省は求めている。スマートトークでは、テーマを提示して行われる。今回は、初対面の方も多いので英語による自己紹介を設定した。

2 番目は英語教育の方向性をテーマに、日本の英語教育政策がどのような方針で改革を進めようとしているのかを受講者が理解できる内容とした。新学習指導要領の全面実施を見据え、そのねらいや授業改善の具体について、15 分程度で分かりやすく紹介するビデオクリップを文部科学省が作成し You Tube チャンネルで公開されているので、それを利用するにした。上智大学教授の吉田研作氏と文部科学省外国語教育推進室長の金城太一氏が対談方式で解説する「日本の外国語教育はこう変わる！」(文部科学省 2018a)を視聴する

計画であった。残念ながらネットの通信状態が悪く、講座実施日にはこの動画のみ視聴することができなかつたため、筆者が口頭で説明した。

3番目に、英語を使ったコミュニケーション力を育てる内容に変遷してきた一例として、中学校英語科の教科書を対比して示した。図1は、中学生1年生が使う2018年東京書籍発行教科書(笠島ら 2018)の第1課の最初である。ここでは、学ぶ目的が明記されているのと同時に、どのようなコミュニケーションの場面で教科書の英語が使われるのかについて、状況設定を明確にしている。基本文は、“I am Ellen Baker.”であり、自己紹介をする場面を設定している。一方、図2は、同じ出版社から1976年に発刊された中学生1年用(太田ら 1976)の第1課の最初である。ここでは、学ぶ目的は明記されていない。また、どのようなコミュニケーションの状況設定なのかは明確ではなく、しかも、基本文は、“This is Japan.”である。男子生徒が日本地



図1 2018年発刊
中学校英語教科書

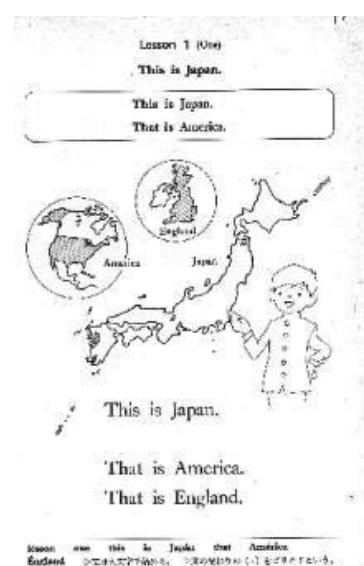


図2 1976年発刊
中学校英語教科書

図を指しているイラストが掲載されている。コミュニケーションで使う場面が多いと考えられるのは、日本を紹介するよりも自己紹介の方であろう。主語も“this”よりも“I”を扱つた方が現実のコミュニケーションとしては自然である。

受講者が新旧の英語教科書を対比することで視覚的に英

語教育がコミュニケーション重視の方向に変わってきたことを理解できたと把握している。

1コマ目の最後は、小学校英語教育の実際をビデオを見て学んだ。このビデオクリップは、前出のYouTubeチャンネルにある文部科学省作成の「小学校の外国語教育はこう変わる！」(文部科学省 2018b)を使用した。このビデオクリップは、小学校での英語教育の授業と研究協議会を録画したもので、子どもたちの学びの拡がり方や教師側の指導のポイントがよく理解できるコンテンツになっている。

4.3.2 2コマ目 基礎的英語力のブラッシュアップ

小学校教員で自身の英語力に不安を抱いている者が多いことは想像に難くない。これに対峙していかなければ、指導者の問題解決にはつながらない。松宮(2013)は、指導者の授業指導不安を生み出す要因は、英語力に対する不安であることを明らかにした。国や地方行政レベルで実施されている外国語活動担当教員研修等では、指導方法や指導内容に関する研修が主であるため英語力養成に焦点を当てた研修の必要性を提言している。

小学校教員であっても中学校、高等学校、大学と英語を学んできている。受講者が学んだ英語を呼び起こし活性化すると同時に興味を持って学び続けようとする意識を持つことが重要である。文部科学省は、学び続ける教員像を打ち出しており、語学もまさしくそれに適合する。この講習を終えてからも学び続けようとする意識をもてるような内容になるよう工夫した。本ブラッシュアップでは、以下の内容で構成した。

① 発音・リズム特訓

田辺(2017)は、発音が外国語活動において最も必要とされるスキルであるにも関わらず、小学校教員はその基礎的な知識や技能でさえ持ち合せていないため、教員免許状更新講習において、発音・スピーチング演習に関するセッションを設けた。その結果、受講者の満足度は、全てのセッションの中で最も高かったことを明らかにした。

本講座においても、発音に関するセッションを設けた。小学校でも使える教材である子どもの歌を用いて英語の発音とリズムを体験的に学べるように工夫した。歌は“Ten Fat Sausages”である。歌詞には、英語を指導する上で重要な音素である /f/ /p/ /r/ /s/ /t/ などが入って

おり意識し歌うことで学ぶことができる。また、/ p / と / b / / r / と / l / / s / と / sh / で単語を提示しながら比較して発音練習できるようにした。

個々の音素の発音に加えて英語に特有の強勢リズムを意識して学ぶことも重要である。この歌も分かりやすい英語でよく似たフレーズが繰り返されるので、強勢リズムを意識しながら歌うことができる。受講者には、英語の強勢リズムについて概要を説明した後、この歌でそのリズムを意識するように促した。

② シャドーウイング特訓

近年、シャドーウイングが英語教育の分野で盛んに取り入れられている。門田・玉井(2017)は、シャドーウイングにはインプット効果、プラクティス効果、アウトプット効果があり、それらの効果からリスニング力やスピーキング力を向上させると述べている。筆者の受けもつ大学の授業でもシャドーウイングを組み入れているが、多くの学生たちは聞けていなかった英語が聞けるようになったと感じている。本講座においてもシャドーウイングを行った。

シャドーウイングでは、You Tube で視聴することが可能である Toy Story 4 の公式プロモーションビデオを採用した。英語のセリフに数ヶ所空欄を設けて、視聴しながらどんな英語が入るのか考えた。正答を確認した後で、英文を見ながら音声に合わせて音読するシンクロ・リーディングを数回、実施した。次に、ビデオを見ながらシャドーウイングに挑戦した。しかも、シンクロ・リーディングとシャドーウイングはどちらも自分



図3 バナフォン



図4 大学でバナフォンを使用した授業の様子

の音声に集中できるようにするためバナフォン(図 3・4)を使用した。バナフォンは電話の受話器のような形をした器具で、自分の耳と口を近づけて、自分の発した声に集中して聞くことができる利点がある。シンクロ・リーディングやシャドーウイン

グなどと併用すれば、リスニング力の伸びを実感することができる。

シャドーウイングを数回した後で、もう一度、ビデオを視聴した。受講者たちも、どのような英語が話されているのか理解しながら聞けていることを実感することができていた。

同じように、中学校 1 年生で学ぶ自己紹介と中学校 3 年生で学ぶ自己紹介を英語でマンブリング、シンクロ・リーディング、シャドーウイングをして練習を重ねた。

③ リーディング特訓

リーディングの教材は、オンラインで入手可能な「ジャレマガ」を使用した。これは、元名古屋女子大学教授の Douglas S. Jarrell 氏が日々感じる興味深いことについて、短い英文で書いて送信している無料メールマガジンである。受信した1つを紹介した。定期的に簡潔な英語で書かれた文が届くため、これを機に登録を勧めた。

本講座を受講した教員の英語力は幅広い状況であったが、自分の英語力や興味に合わせて、教材を選び学び続けることが語学には必要であることを強調した。

4.3.3 3 コマ目 小学校英語教育を支える背景知識と

クラスルームイングリッシュ

中学校や高等学校の英語科の教員免許状を持っている受講者はここでの学ぶ事項は既知であるが、小学校の教員免許状のみ所持の受講者には学んで欲しい理論や技能である。小学校教員養成課程において外国語(英語)コアカリキュラムの「外国語／英語科に関する専門的事項」で扱うものである。時間上の制約があるので、特に重要なところを抽出し、以下の順で講習を行った。

① コミュニケーション能力

コミュニケーションの定義は数多くあり、それを特定することは難しいが、その定義を考えた上でコミュニケーション能力について触れられるようにした。

今回は、「2 人以上の人間が言語、準言語、その他の非言語コミュニケーションの要素を媒介として直接的、間接的に意思疎通すること」と大まかなコミュニケーションの考え方を示した。

その次に、英語教育の分野では必ず学ぶようになったCanale (1983) の社会言語学的考え方も含めた4部構成(文法能力、社会言語能力、談話能力、方略的能力)からなるコミュニケーション能力を具体例を入れて紹介した。

② 第2言語習得論

第2言語習得論では、小学校英語教育の教育内容や指導法と深く関連しているインプット仮説、アウトプット仮説、インターラクション仮説の3つに触れた。

③ 英語教授法

英語教授法では、オーディオ・リンガル・メソッド、全身反応教授法、タスク中心教授法、内容言語統合学習の4つを学んだ。それぞれの教授法について、具体的な活動例を加えながら理解できるようにした。

④ クラスルームイングリッシュ

クラスルームイングリッシュは、英語を使ったコミュニケーションの場を教室内でつくり出していく意味からも大切である。しかしながら、英語に課題意識を抱いている小学校教員にとっては、抵抗感が大きいと考えられる。やはり、個人の努力により実践の場で使うことによって徐々に英語力を付けていくことが方策であろう。

授業で使えそうなクラスルームイングリッシュの50表現をゲームを使って慣れ親しみ、習得できるように準備していたが、十分な時間が確保できず紹介のみになってしまった。時間配分の計画が不十分であったことが原因であり、次回に向けての改善が必要である。

4.3.4 4コマ目 小学校英語教育に必要な教育技術

授業の実践に役立つ小学校英語教育の指導方法に関する講習である。最もニーズが高い分野である。指導方法に関しては、話を聞くだけでなく必ず体験することが必須である。しかも、様々な活動を関連もなく体験することは授業設計や単元構成には役立たないので、すべての活動が最終のコミュニケーション活動(言語活動)につながるようにした。

最終のコミュニケーション活動は、受講者が旅行代理店と客に分かれて、行きたい国やその理由を伝えたり、お勧めの名所や食べ物などを伝えたりする。今回、中学校や高等学校で

英語を教えている教員がいるので、その教員たちは旅行代理店の接客役をし、他の受講者は客となる設定にした。この最終活動に至るまでの内容を以下、実施した順番に述べる。

① スモールトーク

文部科学省(2017)は、新学習指導要領では、言語材料の定着にも重点が置かれており、学んできた言語材料を繰り返し使用できる機会の保障を求めている。その機会がスモールトークである。スモールトークでは、本当の出来事や気持ちなどについて英語でのやり取りをし、既習表現を想起できるような指導や援助を行うようにと述べている。単元ごとに学んだことが断片化していくは、コミュニケーションを図る基礎的な資質・能力の育成にはならないため、スモールトークが推奨されていると理解できる。

スモールトークの重要性を伝えた後、受講者が実際に取り組んだ。最終のコミュニケーション活動にも関連させるため、“What's your favorite food?”というテーマでペアになって行った。

この活動から受講者は、子どもの立場で参加するように状況を設定した。

② 指導者のデモンストレーション

最終活動のゴールを示すために筆者と中学校英語科教員である受講者によるデモンストレーションを披露した。

③ 聞くことの活動

筆者が国旗カードを見せながら、受講者に問いかけるようにしてイタリア、フランス、オーストラリア、ベトナム、韓国など10か国の国名を発音して提示した。

この段階では、無理に発音することを強要せず、聞くことに重点を置いた。日本語とは発音が異なる言語について発音することに難しさを感じる子どもが存在することを指導者は理解しなければならないことを伝えた。また、インプット仮説で学んだ理解可能なインプットも関連していることに触れた。

④ チャンツ

英語の語彙や表現を繰り返し発音することは、英語教育の中では必要ではあるが、指導者の発音に続いて子どもたちが発音を繰り返すだけでは単調な活動になってしまふ。そこで、子どもたちが興味や関心をもって発音に取り組めることができ

るチャンツの重要性を伝えた。チャンツでリズムを取るために使用したのは、メトロノームである。メトロノームは簡単に速さを調節することができ、しかも、指導者の声の音程を変化させることで、子どもたちの発音に対する興味・関心を高めることができる。

紹介した国名を、メトロノームのテンポに合わせて発音を繰り返すのだが、徐々にテンポを速くして取り組んだり、突然、テンポをかなり遅くしてゆっくりと発音したりして、変化を楽しめるなどを紹介した。結果的には、発音やリズムに慣れ親しむことができるのである。また、“Where do you want to go?” や “I want to go to Australia.” の表現についてもチャンツで発音の練習を行った。

⑤ ゲーム

世界地図を配布し、受講者が“Where do you want to go?”と筆者に尋ね、筆者が “I want to eat Tim Tam. I want to see koalas. I want to see the Opera House. So I want to go to Australia.” などと言えば、受講者が地図上のその国における位置を置くゲームを行った。その他、ミッシングゲームやスリーヒントゲーム、インタビューゲームなどを体験した。

⑥ コミュニケーション活動(言語活動)

旅行代理店の接客役をする人には、海外旅行の観光パンフレットを配布し、それを使って客に旅行の提案をしたり、希望を聞いたりするように伝えた。客の役をする人には自分の行きたい国を中心に10か所以上ある旅行代理店を訪ねるようにした。

どのブースも受講者は、主体的に英語を使って、コミュニケーションを取っていた。このような活動を教師自身が体験する機会が増えれば、英語を強制して学んでいるのではなく、活動する中で英語をプラスアップしていくことにもつながる。

4.3.5 受講者に対する質問紙調査結果と考察

本講習の受講者を対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、「働いている校種」「小学校での英語指導の有無」「英語が好きかどうか」「講習内容が教員としての知識や技能の更新に役立ったか」「小学校英語教育の研修に対する認識」「自身の英語力」「本講習に対する自由記述」に分類できる。自由記述項目以外は、はい・いいえを選択するか、4件法(1. 全くそう

思わない、2. そう思わない、3. そう思う、4. とてもそう思う)で行った。回答は匿名とし、講習の成績には全く関係のないことを確認した。

① 受講者の働いている校種

受講者の働いている学校の校種の割合が図5である。本講習での主な対象者は、募集要項に小学校教諭・中学校英語科教諭と掲載しているが、高等学校の教員が約1割いるこ

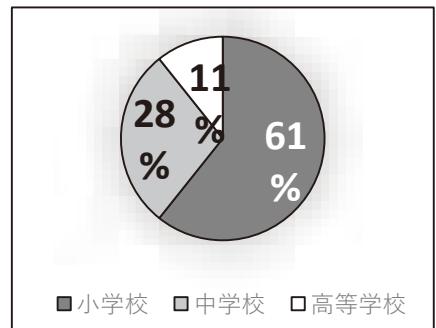


図5 受講者の校種

とは特色と考えられる。小学校英語教育への関心の高い教員が受講していると推察できる。

② 受講者の英語に対する好き嫌い

小学校教員に英語が好きか嫌いかを聞いた項目の結果が図6である。小学校教員に限って考えると、本講習が選択講習であるため受講層

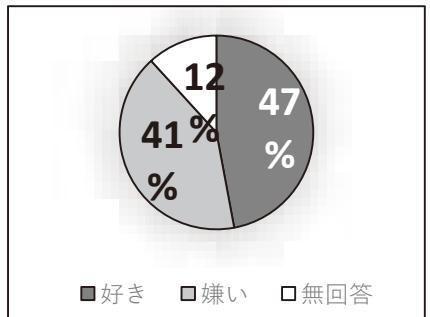


図6 小学校教員の英語好き嫌い

が二つあると考えられる。一つは、英語が好きで、小学校英語教育にも主体的に関わっている層。もう一方は、英語は嫌いだが、小学校英語教育が発展している中で、課題意識をもって前向きに取り組んでいく層である。本講習を受講して、英語を嫌いと回答した人がさらに英語嫌いになることのないように留意しなければならない。できれば、英語に対して興味や関心を高め、学び直そうを感じができる講習でありたい。今後、受講する小学校教員の英語嫌いの詳細な調査も必要と考えている。なお、中高の教員は、全員が好きと回答している。

③ 受講者の小学校英語教育指導状況

小学校で英語を指導している小学校教員は約6割あり、中

学校教員で教える者は誰もいなかった。英語を指導していない小学校教員が4割存在することと、全中学校教員が指導していないことは、講習担当者として留意しなければならない。

指導していない教員を意識して、小学校英語教育の内容や方法が理解しやすいように具体例の紹介や視聴覚的な手段等を用いるようにすべきである。

④ 小学校英語教育を実施する上での自己英語力認識

図7は、小学校教員が小学校英語教育を行う上で、自分の英語力は十分あると考えているかについての項目である。この項目は、英語が好きか嫌いかと大きく関係していると考えられる。

一方、図8は、中高教員が同じ問い合わせに対して回答した結果である。特筆すべきは、中高教員の中に、小学校英語教育を行う上で、自分の英語力が十分でないと考えている者が存在していることである。この点に関しては、どのような力が十分でないと考えているのか詳細な調査が必要と考える。

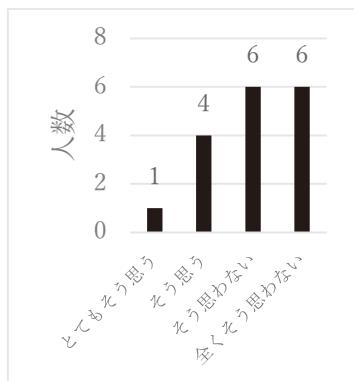


図7 英語力の認識（小学校教員）

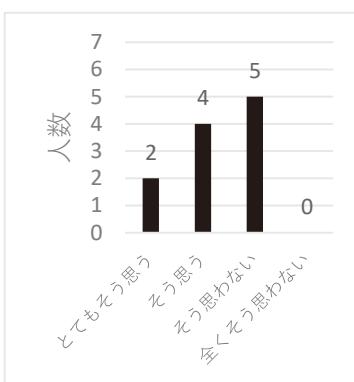


図8 英語力の認識（中高教員）

⑤ 講習の役立ち度評価

図9は、講習全体と各コマについて、教員としての知識や技能の更新に役立ったかを4件法(4:とてもそう思う、3:そう思う、2:そう思わない、1:全くそう思わない)で回答した平均値の結果である。どの項目でも、数値3(そう思う)を超えており、実施内容への肯定的評価がされたと言える。3.3.3で引用した先行研究と同様に、明日からの授業にも使うことができる教育技術について、高い評価を得ている。それと同じくらいに高評価であったのが、英語力ブラッシュアップとクラスルームイングリッシュである。どちらも、教員の英語力育成であり、受講者の

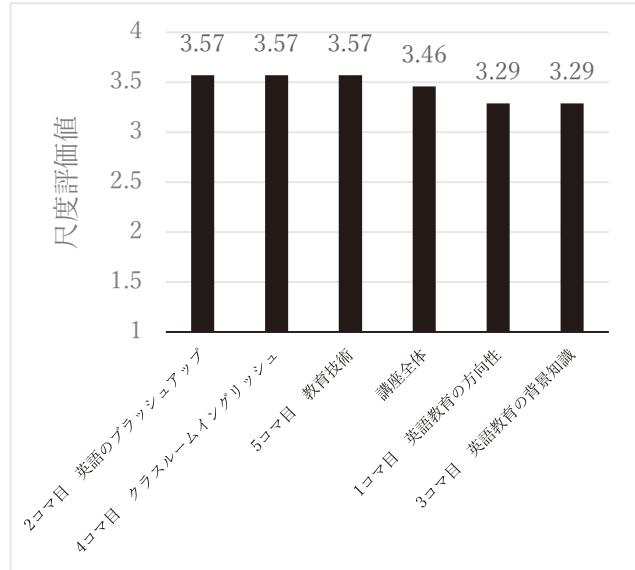


図9 講習の役立ち度評価（全体と各コマ）

ニーズに対応できたと推測できる。クラスルームイングリッシュが時間の関係上、紹介程度であったにも関わらず高評価を得ているのは、関心の高さが表れていると推察できる。

英語教育の方向性や背景知識は、肯定的に捉えられては

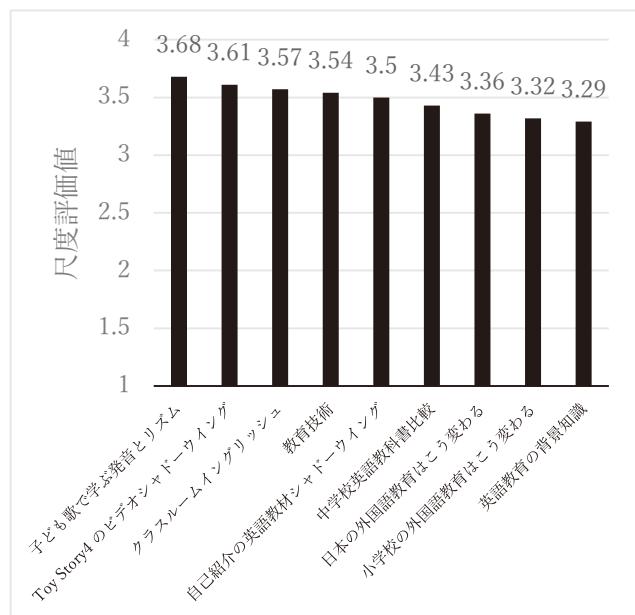


図10 講習の役立ち度評価（講習内容）

いるが数値は、他のものと比べて低い。前述の先行研究でも提言されているが、「外国語／英語科に関する専門的事項」の範疇となる教育政策や理論は、ニーズは高くはないが、実践を支えている事項を理解して指導に当たることが重要であるため、さらに、受講生に応じた内容の工夫が求められる。

図10は、各コマを構成していた研修内容別で、教員として

や技能の更新に役立ったかを 4 件法で回答した平均値結果である。一番高い評価を得たのは、子どもの歌で学ぶ発音とリズムであった。このような発音とリズムに特化した研修を受けたことが今までなく、しかも、受講者ニーズに合致し、英語の発音とリズムの要点を理解できる内容であったためと推論できる。

⑥ 本講習に対する意見(自由記述)

下記の自由記述からも概ね実施した教員免許状更新講習に対して受講者の満足度は高く、実務家教員として小学校教員の視点に立った理論と実践を兼ね備えた内容を開発することができたと考えている。自由記述の中には、内容に関して提案も含まれるので、必要なものは改善していく計画である。特に、小学校英語教育からかけ離れた内容が、英語力ブラッシュアップに入っていたので、幅広い受講者に対応し、しかも、小学校英語教育に関連しているものを考えていかなければならない。また、一人ではあるが、実践的な内容とは言い難いと回答があった。どこがどう実践的でないと感じられたのか、具体的な回答が得られるように質問紙調査の改善が求められる。

【 講習の内容に関する意見(自由記述) 】

- ・実践的でとても楽しかったです。この楽しい気持ちを授業に生かしていきたいと思います。
- ・とてもよく準備をされていてたので、充実した 1 日になりました。本当にありがとうございました。
- ・改めて、学習指導要領から目指すべき姿を確認できしたこと、実践例から新たな発見や再確認すべきことが見つかったことがよかったです。
- ・小学校で使えるゲームなどが、実際に自分たちで体験できたのはよかったです。
- ・講師先生のお話が面白く、また、英語教育に対する熱意もノウハウも素晴らしい高くて、受講できてよかったです。
- ・授業で行き詰まりを感じていたので、今日の講習で教えていただいた数々のスキルを今後生かしていきたいです。

- ・講師先生が始終笑顔で楽しく教えてくれたのがよかったです。
- ・講義と活動のバランスがよくて、受けていてとても楽しかったのと、映像があつたのがよかったです。
- ・学習指導要領の内容や今後の方向性を学べ楽しく学ぶことができました。
- ・専門的なことから、明日の授業ですぐ使えることまで幅広く教えていただきありがとうございました。
- ・コミュニケーション活動、グループ活動で楽しく学べました。
- ・バナフオンは、自分の発音をよく聞くことができて欲しくなりました。英語の発音の R と L の違い等、分かりやすく教えてくださいありがとうございました。
- ・シャドーイングをするときは、向かい合った状態ではなく、正面を向いて座った状態で行いました。バナフオンを使用しても周りが気になり集中しづらかったので、いまいち効果が実感できなかった。
- ・グループワークがたくさん設定されていて、主体的に学ぶことができました。あつという間の 1 日でした。
- ・英語が不得意な子どもも楽しんで、活躍できる指導法、ゲームなども教えていただきたいです。
- ・英語は、とても苦手で、話すことも積極的になれなかつたので、まずは、聞いて慣れ親しむことから自分なりに取り組んでいかなければと思いました。
- ・具体的なゲーム等の活動例を取り上げていただいて、楽しく取り組む指針をいただきました。
- ・活動内容を小学校で扱うとよいものに絞って紹介いただくと今後の参考にしやすいと思います。
- ・Toy Story の英語は、難しすぎるので、扱うのであれば「○○という台詞が聞こえたら手を挙げてごらん」等の方がよいかと思います。
- ・小学校において、実践的な内容だったとは言い難い。

5. おわりに

日本の英語教育は、学校種間の接続に課題を抱えている。この状況を打破するために、学習指導要領の改訂を機に小学校から高等学校までを見通した教育政策が動き出そうとし

ている。つまり、「何ができるようになるか」という観点から、小・中・高等学校を通じた 5 領域「聞くこと」「話すこと(やり取り・発表)」「読むこと」「書くこと」別の目標が設定されたのである。

このような流れの中、小学校中学年「外国語活動」と高学年「外国語科」が本格的に開始される。それに備えて、教員養成と現職教員研修の両面から指導力の向上を目指す必要がある。小学校教員を養成する大学では、必修として「外国語の指導法」と「外国語に関する専門的事項」の開講が始まった。一方、国が考える現職教員に対する研修は、英語教育推進リーダー教員を養成し、各学校で伝達講習を行い英語教育の指導体制の強化を図る施策が行われてきている。

残念ながら、2020 年から万全の指導体制で小学校英語教育を進めることができる小学校は少数派であろう。多くの小学校では、不安を抱えて試行錯誤の船出となるかもしれない。この過渡期的な状況を乗り越えていく方法の一つが、研修である。

現職教員研修において、教員養成系大学が果たす役割は大きいと考える。毎年、計画的に実施されている教員免許状更新講習を活用していくことが肝要である。受講者ニーズが高い小学校英語教育に係る教員免許状更新講習を開設している大学は、各県に必ず 1 大学以上存在するであろう。これからは、量と共に講習の質を高める時に来ている。

筆者は、2019 年度和歌山大学教員免許状更新講習で小学校英語教育に関連した選択講習を担当し、実務家教員としての学びを生かした内容の充実を図った。内容の柱として、「小学校英語教育の方向性」「基礎的英語力のブラッシュアップ」「小学校英語教育を支える背景知識」「小学校英語教育に必要な教育技術」の 4 つとすることを提唱する。

教員免許状更新講習の目標である「教員としての知識や技能の更新」に役立ったとする受講者の評価を得ることができた。2020 年度も開講する準備を進めている。教員免許状更新講習を担当する側からの反省と受講者側からの質問紙調査の考察を基に来年度の講習の改善を行い、質の向上を図っていくことが重要と考えている。

謝辞

本研究の実施に当たり、教員免許状更新講習受講後のお疲れにもかかわらず、質問紙調査へご回答いただきました先生方に深く感謝いたします。

引用文献

- アレン玉井光江 (2010) 『小学校英語の教育法』
大修館書店
- 猪井新一 (2009) 「英語活動に関する小学校教員の意識調査」
『茨城大学教育実践研究』 第 28 号 pp.49-63
- 卯城祐司 (2015) 「小学校における外国語(英語)活動」
『英語科教育法』 望月昭彦編 大修館書店
- 碓井岑夫・八木成和・植田義幸・上野淳子 (2009) 「小学校教諭および幼稚園教諭の教員免許状更新講習に対するニーズ」『四天王寺大学紀要』 第 47 号 pp.355-368
- 江利川春雄 (2015) 「歴史の中の小学校英語教育」『世界と日本の小学校英語教育』 西山教行・大木充編著
明石書店
- 岡秀夫・金森強 (2007) 『小学校英語教育の進め方』
成美堂
- 太田朗・伊藤健三・日下部徳次ら他 14 名 (1976) 『中学校外國語科用文部省検定済教科書 NEW HORIZON 1 REVISED EDITION』 東京書籍
- 笠島準一・関典明ら他 37 名 (2018) 『中学校外国語科用文部科学省検定済教科書 NEW HORIZON 1』 東京書籍
- 門田修平・玉井健 (2017) 『決定版 英語シャドーウイング』
コスモピア
- 川端松晴 (2008) 「わが国における英語教育の現状」『小学校英語教育のこれまでとこれから』 河原俊昭編 めこん
- 岸田正幸 (2008) 「教員免許更新講習開設に向けての課題」
『和歌山大学教育学部教育実践センター紀要』 No18 pp.41-50
- 岸田正幸 (2009) 「動き始めた教員免許状更新講習の課題」
『和歌山大学教育学部教育実践センター紀要』 No19 pp.55-61
- 田辺尚子 (2017) 「小学校学級担任の外国語活動に対する不安を軽減するための研修に関する一考察」『安田女子大学紀要』 No45 pp.99-108
- 長濱茂喜 (2016) 「教員免許更新講習の現状と課題」『熊本大学教育実践研究』 第 33 号 pp.181-189
- 樋口忠彦 (2010) 『小学校英語教育の展開』 研究社
- 廣江顕、畠田秀将、松元浩一 (2015) 「小学校外国語活動

- の新制度に伴う対応』『長崎大学イノベーションセンター紀要』第6号 pp.37-50
- 松川禮子 (2004) 『明日の小学校英語教育を拓く』
アプリコット
- 松川禮子 (2019) 『小学校英語教育のこれまでとこれから』
開隆堂
- 松宮新吾 (2013) 「小学校外国語活動担当教員の授業指導
不安にかかわる研究」『関西外国语大学 研究論集』
第97号 pp.321-338
- 文部科学省 (2017) 『小学校外国語活動・外国语 研修ガイド
ブック』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm 2019年1月8日閲覧
- 文部科学省 (2018a) 「日本の外国语教育はこう変わる！」
<https://www.youtube.com/watch?v=ZTx9qC80nIA>
2019年1月8日閲覧
- 文部科学省 (2018b) 「小学校の外国语教育はこう変わる！」
<https://www.youtube.com/watch?v=Al1qTOaOGgI>
2019年1月8日閲覧
- 和歌山大学 (2019) 『平成31年度和歌山大学教員免許状更新講習募集要領』
- Canale, M (1983) From communicative competence to
communicative language pedagogy. In J.C.Richards &
R.W.Schmidt (Eds), *Language and communication* (pp2-
27). Harlow, UK: Longman